

川崎市文化協会会長賞

ぼくの銭湯愛

梶ヶ谷小学校 6年生 久留 友弥

「極楽極楽」サッカーの後に入る銭湯は格別だ。色々な種類の湯、全部の種類に入るけれど、どれから入るかは悩みどころ、少し考えて答えが出る。

「一番近いところでいいや」

結局は適当に決める。しばらくして他の湯に移動する。それをまた何回も何回も繰り返す。気づけば三十分以上たっている。ずっと入っていたいくらいだけど入りすぎるとのぼせる。時々、人間のぼせない体にならないかなと思うこともある。本当に出たくない。温泉の中になんて入っていたい。だがもう出る時間。あがって体を拭いて、服を着て、食堂に向う。

食堂には様々な食べ物がある。余裕で百種類は超えている。全部美味そう。迷う。だが、「何となくこの気分だな」

結局適当に決める。考えるのに体力を結構使ってしまった。つかれた。料理を待つ間に漫画を読む、いっぱい漫画がある。どうしよう、また迷う。でも結局は適当に決める。なんとなく流行っているやつを読む。面白くて、夢中になっているうちに料理がくる。「いただきます。」うまい。やばい。さすがだ。「やっぱりこの料理を選んでよかった。まあはずれはないけれど」と心で思いながら黙々と食べ続ける。一言も発さずに食べ続け十分ほどで食べ終わる。「ごちそうさまでした。」美味しかった。銭湯はなんでもあってぼくには絶対に必要な存在。そんな銭湯が大好きになったのには色々な理由がある。

鹿児島のおじいちゃんの家近くに銭湯があった。約八年前からお父さんとよく行っていた。そのときはまだ、「銭湯が大好き」というほどでもなかった。約二年前サッカーの友達に銭湯に誘われて久々に銭湯に行ったときのことだ。久々の銭湯にドキドキした。入ると、これまでの僕の知っている銭湯じゃなかった。一瞬場所を間違えたのかと思うぐらいに違った。まず思ったのは、広さ。尋常じゃないほど広かった。他にも、食堂があったり、漫画があったり、ゲームセンターもあった。もうショッピングセンターのようだ。それから約二年間様々な銭湯に行った。それで一つ思ったことがある。自分が大好きな銭湯の魅力を様々な人に知ってもらえるように、誰もが楽しめるような銭湯をつくりたいと思った。それはとても大変で、お金もいっぱいかかることはわかっている。だけど、どんなにお金がかかってでも、色々な人が楽しんでくれて、うれしい気持ちになってくれればいい。それを目標に作る銭湯のイメージはこんな感じだ。

まず、50組250人が入れる食堂。昔の漫画から最新の漫画まで色々な種類の漫画。ゲームセンターも十円からできるお手頃価格のものをつくりたい。そして小学生以下は、一回無料でゲームセンターのやつをプレイできるようにしたい。そして、

乳幼児や幼児などがたくさん遊べるボールプールやスポンジのツミキ。温泉は男風呂、女風呂各百人ほど入れる大きな温泉。そして銭湯といえば卓球。これも五台ほどつくりたい。そして最後にその銭湯の名前が、

「ホワイト銭湯」

理由は、白は様々な色に変われるからだ。変われるということは無限大の可能性があるから、その銭湯も無限大の可能性に満ちてほしいからだ。

もしこのような銭湯を作れていなかったとしても人を楽しませる、喜ばせる、そんな仕事につくことができれば目標達成だとぼくは思っている。